

〔大鏡内大臣道隆〕此おと、○道隆、中略御賀茂詣の日は、社頭にて、三度の御かはらけ、定まりにて参らするわざなるを、其御時には、禰宜神主も心えて、大かはらけをぞ参らせしに、三度はさらなることにて、七八度などめして、上の御社に参り給ふ路にては、やがてのけざまにまりのかたを御まくらにて、不覺におほのごもりぬ、○中まゐりつかせ給ひて、御車かきおろしたれど、ええらせ給はず、いかにと思へど、御前ども、えおどろかしまうさで、只さぶらふなめるに、入道殿、○藤原道長おりさせ給へるに、さてあるべきことならねば、轅のとながら、たかやかにや、と御扇をならしなどせさせ給へど、おどろき給はねば、○下略

〔葉黃記〕寛元四年正月九日己亥、今夜東宮、○龜山行啓前右府、○藤原實氏冷泉第、○中略抑路次之間、諸司二分一切不見、御車副二人、其外召使等付轅爲奇、

〔徒然草上〕北の屋かげに消残りたる雪、いたうこほりたるに、さし寄せたる車の轅も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、くまなくはあらぬに、○下略

〔太平記九〕六波羅攻事

千種頭中將忠顯朝臣士卒ニ向テ被下知ケルハ、此城尋常ノ思ヲ成テ、延々ニ責バ、千葉屋ノ寄手、彼ヲ捨テ、此後攻ヲ仕ツト覺ルゾ、諸卒心ヲ一ニシテ、一時ガ間ニ可責落ト被下知ケレバ、出雲伯耆ノ兵共、雜車二三百輛取集テ、轅ト轅トヲ結合セ、其上ニ家ヲ壞テ、山ノ如クニ積舉テ、櫓ノ下ヘ指寄、一方ノ木戸ヲ燒破ケリ、

〔太平記二十三〕土岐頼遠參合御幸致狼籍事附雲客下車事

如何ナル雲客ニテカ有ケン、○中略轅ハグタル破車ヲ、打テドモ行ヌ疲牛ニ懸テ、北野ノ方ヘゾ通リケル、

〔看聞日記〕應永廿六年十月廿五日、於聖幢庵有大飲云々、秉燭以後被歸之間、牛飼下部等沈醉於松